

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ①人材養成目的に沿った科目構成の整理

##### 《人社系》

##### ●東北大学情報科学研究科

##### 「情報リテラシー教育専門職養成プログラム」の事例

##### (具体的に何を実施したのか)

本プログラムは、先端的理論研究のみならず、社会で実践的に使用できる分析方法及び技能を習得することも重点的課題の一つに位置づけている。そのために有用な授業科目を新規にいくつも開講した。科目は相当数あるが、いくつか紹介すれば、「情報リテラシー実習A・B」「メディア・リテラシー」「サーヴェイ・データ解析」「英語プレゼンテーション」「情報教育論」などを挙げることができる。またプログラム履修者の実践的な取組を重視し、修士論文の代わりに情報教育の体系的カリキュラムのモデル案の作成などを修了要件の単位としてみなすことができるようにするなど、履修カリキュラムの整備などを図った。

##### (実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

上記開講科目を実施するにあたり、本プログラムの特徴・性格にしたがい、単に理論研究にとどまることなく、将来的に社会で働くようになった際にもそこで得た知識やスキルを活かし応用することができるように、講義における実習テーマについては可能な限り現場やフィールドでの体験的・実験的・試行的活動を盛り込むように努めた。

##### (どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

情報を正確に読み解く能力、適切に質問・聴取する能力、統計・計量の手法など、開講科目の多くは社会を生きる上できわめて有用な知識・技能であることから、プログラム履修生のみならず、一般学生も積極的に受講する姿が見受けられた。情報リテラシー教育は、現在及び将来を生きる上で誰にとっても必要不可欠のマナー、エチケットであることを実感することができよう。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

#### ①FD体制の整備充実

##### 《人社系》

##### ●東北大学情報科学研究科

##### 「情報リテラシー教育専門職養成プログラム」の事例

##### (具体的に何を実施したのか)

本プログラムを担当する教員には、学校・大学で実施されている情報教育の実態の現状を正確に知り、その理解を共有する必要がある。そのために、学内外また海外から「FD研修」と称して多数講師を招き、学習・課題の発掘、解決の方法発見などに努めた。その一つとして、仙台市・宮城県の小中学校で勤務する教員及び大学教員と協働して「情報活用型授業を深める会」(通称:「ジョーカーの会」)という学習組織を立ち上げ、「教育の情報化」の一層の効果的推進を図った。現在もほぼ三カ月に一度、定期的に開催している。

##### (実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

「教育の情報化」を強化し推進するためには、学校現場で実際に授業に従事している教員のその面での教育力・指導力が向上し、授業自体の内容・レベル・質が高まる必要がある。そのために、「ジョーカーの会」では、実際の授業をその場で再現し、そこで使用する情報手段・道具、また機器などの効果的かつ有効な使用法を、参加者全員で討議し探究した。

##### (どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

大学教員は、ややもすれば教育現場の実態を十分に知ることなく、専門的に高度な理論をかざし、改善・改良を迫る。しかし、特にFD研修では、現場や実践的に精通している講師を多く招き、また多くの小中校の現役教員と一緒に学習することを重視したゆえ、現場の生の声や悩みに触れることができ、それを踏まえて授業科目の内容・質を一層改善・改良することができ、より充実した事業展開を図ることができた。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### E. 学習・研究環境の改善

#### ②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

##### 《人社系》

##### ●東北大学情報科学研究科

##### 「情報リテラシー教育専門職養成プログラム」の事例

##### (具体的に何を実施したのか)

情報リテラシーに専門的に取り組む研究機関は、世界・日本のどこにもないと思われる。その意味で本事業は特筆すべき活動であろう。しかし、関連して教育研究に取り組んでいる学術機関は少なくなく、積極的に視察・調査を行い、研修に参加した。たとえば、PODS(Professional Organizational Development Network in Higher Education)、UC Berkeley、Stanford University などがある。さらに、本プログラムでの事業や研究成果を広く内外に周知し理解してもらうために、とりわけ履修生に積極的に研究成果の発表を行ってもらった。その中には、CPATHi、復旦大学(上海)、The International Conference on Information in Secondary Schools: Evolution and Perspectives (in チュリッヒ) など、海外でも積極的に研究発表が行われた。そのような事業推進のために、可能な限り財政的支援を図った。

##### (実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

実践的課題を負う研究の質を高めるためには、現地での視察調査・研修等が極めて重要である。それを円滑に実施するためには、財政的支援は不可欠である。本プログラムでは、その意味において柔軟に運用することができ、有益に活用することができた。また他方研究者・専門家などの評価をおおぐ必要がある。そのひとつの方策として、学会等での研究発表がある。そのための財政的バックアップを図ることができ、履修生の国内外での積極的な発表につながったと思われる。

##### (どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

履修生のうち、社会人を除くほとんどが、国内・海外での研究発表や視察・調査に取り組むことができた。その経験は、研究の充実・発展のために多大な貢献を果たし、研究論文としてまとめられたものも多い。すでに社会人として働いている履修生もいる。プログラムの履修、教育研究が大いに役に立っていると思われる。